

印旛沼の鳥類

箕輪義隆（日本鳥類保護連盟調査室）・桑原和之（千葉県立中央博物館）・三沢博志（船橋市北図書館）・鈴木 明（環境省・野生生物）・奴賀俊光（千葉大海洋セ）・小林大光（八千代市）・米持千里（千葉市野鳥の会）・田中忠義（八千代市）

印旛沼はガン・カモ類の有数な渡来地であった。ただし、湿地の埋め立てや住宅地の造成などによる改変が著しく、その変遷に伴い鳥類相も変化した。現在でも首都圏では、印旛沼は湖沼で生活する水鳥の重要な渡来地である。しかしながら、個体数変動や鳥類相を長期間、調査している例は少ない。鳥類相の変化は著しいとはいうものの印旛沼では、どのように変化したかはまとめられていない。少なくとも、鳥類相の変遷を把握するためには出現種の目録の作成は必須である。広域の湿地の鳥類の出現種をまとめるには、多くの労力がかかるため単純なリストも作成されていないのが、現状である。1974 年に東邦大学野鳥の会が外来種を含む 109 種の報告をし、その後 1990 年に 132 種の野鳥のリストが作成されている。その出現種のコメントは、感覚的な記載である場合が多く、カウント結果などに基づいた客観的な記述ではなかった。本報告では、現地で行った 1999 - 2004 年の観察結果を基に、千葉県立印旛・手賀自然公園の鳥類相を把握することを目的とし、印旛沼北部調整池・印旛沼西部調整池・甚兵衛広沼およびその水田地帯で鳥類の出現目録を作成した。

印旛沼およびその周辺の湿地や水田、斜面林で水鳥類の調査を行った。その観察結果を基に、印旛沼北部調整池・印旛沼西部調整池・甚兵衛広沼およびその周辺の鳥類の出現種の記録をまとめた。また、印旛沼およびその周辺で確認された種の記録を全て収集した。収集にあたっては、アマチュアの観察者の観察記録や文献の中から印旛沼から記録を全てリスト・アップした。主な観察記録は 1970 年代から 2004 年までの約 30 年間で、標本なども含めると 241 種が確認された。241 種の中でカモ類、クイナ類、シギ・チドリ類など水辺で生活する種類が多く記録された。また、その中には 8 種の外来種が含まれた。千葉県内では 1960 年代まではアカモズは観察されていたようであったが、印旛沼では明確な観察記録が得られなかったため参考種とした。

印旛沼北部・西部調整池では、1970 年代以降、カモ類が優占していた。カモ類の中でも、種により個体数に大きな変動が見られた。Anas 属の多くに増加の傾向があり、マガモは 3500 羽、カルガモは 1200 羽、コガモは 3500 羽が記録された。1970 年代は数羽しか記録されなかったヨシガモは大きく増加し、約 350 羽に増加した。キンクロハジロ、ホシハジロ、ホオジロガモが減少した。1984 年頃からサンカノゴイが継続して繁殖している湿地は、国内では報告されていない。北部調整池や甚兵衛広沼で繁殖しているサンカノゴイが、採食のため印旛沼周辺の水田を利用していることも明らかになった。また、甚兵衛広沼では渡りの時期のチュウサギや越冬期のチュウヒの塒が、ヨシ原に確認された。特にチュウヒの塒は 1980 年代から継続されている。甚兵衛広沼の渡りの時期のサギ類の塒は、2004 年 10 月 7 日に約 1300 羽にも達し、その中に 442 羽のチュウサギが観察された。

このような水鳥の生息地は、国内では少なく貴重な湿地であり、人為的な開発は湿地で生活する種を減少させる。水辺の鳥類の保護を考える上では、鳥類の変遷の調査は欠かせない。鳥類を計画的に保護するには、どのような種が生息しているかを調べる必要がある。サンカノゴイの繁殖地やチュウヒの塒の保護のために、道路などの建設は極力回避すべきである。